

複合的資源管理型漁業促進対策事業（抄録）

齋浦 耕二・池脇 義弘・吉見 圭一郎・團 昭紀

徳島県海域を、播磨灘・紀伊水道・太平洋の3海域に分け、各海域の漁業実態に即した「資源管理型漁業」を推進するための調査をおこなった。

調査結果の詳細は、『平成11年度 複合的資源管理型漁業促進対策事業報告書』を参考にされたい。

播磨灘地域

北灘漁協の小型底びき網漁業の漁獲量調査では、スズキ、カワハギ、マダイなど増加傾向にあるものと、マコガレイやクルマエビ、ガザミなど減少傾向にあるものがみられた。

標本船調査は、北灘および北泊漁協に所属する小型底びき網9隻についておこない、マダイ、ヒラメ、アナゴの漁獲サイズの経年変化を把握した。

資源管理型漁具の試験操業では、袋網が二段になった小型底びき網の漁獲物の分離特性を調査した。その結果、貝殻、石、海藻などのゴミや、大量に入網し投棄物となるウニについてはほとんどが下段に入ることから、選別作業の省力化につながるものと思われた。また、上段に入った漁獲物についてはスレがほとんどないことから、漁獲物の単価向上や再放流した小型魚の生残率向上などの効果も期待できると考えられた。

紀伊水道地域

標本船調査では、和田島、阿南、橘町漁協に所属するパッチ網14隻に操業日誌調査を実施するとともに、徳島市漁協での漁獲物調査でカタクチイワシの成長を把握した。

漁業・経営実態調査では、和田島漁協の標本漁家の月別シラス漁獲量と漁ろう部門と加工部門の油代の関係を整理した。

網目選択性試験では、用船調査でポケット網によるシラス逸出調査を実施した。シラスは袋網末端を中心に逸出しているが、漁獲物との比率をみると逸出数は尾数比率で8~10%、重量比率で1~2%にとどまっていた。また、調査船「とくしま」でカバーネットによる網目選択性試験を実施した。260経での網目選択50%全長は10.23mmとなった。240,220経では採集物のサイズが小さいため明確な網目選択性曲線を得ることができなかった。

シラス資源変動予測モデルでは、日本 NUS にデータ解析業務を委託し、卵稚仔採集データを整理・

集計するプログラムを整備・開発するとともに、重回帰分析による春シラス漁を予測するモデルを開発した。

太平洋地域

漁獲統計調査では、モデル地区（牟岐地区：牟岐東および牟岐町漁協）の月別漁獲統計をもとに、資源管理対象魚種の漁獲統計を把握につとめ、管理効果のモニタリングを実施した。

漁獲・経営実態調査では、モデル地区内の全漁家を対象に、営漁形態の類型分類を試みた。また、類型分類された代表漁家に、年間の営漁スケジュール、1日の操業スケジュール、使用漁具と雇用者、収入水準や後継者に対する意識、将来的な施策への要望などの聞き取りをおこなった。

イセエビ資源の有効利用については、(株)水土舎への委託調査により、全国的なイセエビ産地市場のマーケティング調査をおこない、モデル地区の重要魚種であるイセエビの販売戦略を検討した。同時に、80g未滿のイセエビを標識放流し、資源の有効活用を図るとともに、漁業者に対する啓蒙活動をおこなった。